

## 講演2 「自前の避難スイッチをもとう！」



矢守 克也  
京都大学防災研究所 教授

豪雨災害からの避難のポイントは、煎じ詰めれば、たった二つ、「いつ」と「どこに」である。私の考えでは、「いつ」のポイントは、自前の「避難スイッチ」をもつことであり、「どこに」のポイントは、「最善(ベスト)」だけでなく「次善(セカンドベスト)」の避難場所をもっておくことである。

「避難スイッチ」については、九州北部豪雨(2017年)の被災地に格好のお手本がある。朝倉市平榎地区の事例である。同地区では、複数の住宅が流されるなど大きな被害が出たが、住民は全員無事であった。住民たちが自主避難のための「避難スイッチ」を作っていたからだ。同地区は、2012年の豪雨で、川のそばにある住宅が床上まで水につかる被害が出た。それ以来、住民たちは、この住宅の状況を避難のための目安(「避難スイッチ」)にしていたのである。それが早期の自主避難、人的被害ゼロにつながった。

「避難スイッチ」の材料は、直接体感できる周囲の状況変化だけではない。気象や河川に関する情報も、むしろ大切である。たとえば、宝塚市川面地区で、筆者らは、同地区における避難にとって重要な情報(たとえば、武庫川の水位情報など)だけをピックアップしたWEBサイトを地域住民と一緒に作り、「避難スイッチ」の素材にする活動をしている。情報だけが大事なのではない。情報と「避難スイッチ」を結びつける下ごしらえが大切である。なお、写真左は、三重県伊勢市で、同種のWEBサイトを地区内のスーパーに設置した例である。

「次善(セカンドベスト)」については、西日本豪雨(2018年)の被災地、京都府京丹波町上乙見地区(人口44人、高齢化率50%)でのケースに学ぼう。同地区では、地元消防団員が、独自の「避難スイッチ」をオンにして、特別警報(大雨)の発表や町役場の避難指示発出より前に、大多数の住民を事態悪化の直前に「最善」の避難場所である集落外の施設に避難させた(この事実も注目すべきこと)。それでも、地区を流れ下る小河川の急激な増水で住民数名と消防団数名が取り残される結果となった。このとき、みな最悪の数時間をやり過ごした「次善」の場所が、住民が「お堂」と呼ぶ建物(写真右、道路面から高く集落両側の斜面からも遠い)である。その後、濁流が小康化するのを待ち、全員、他の住民が待つ「最善」の場所へと脱出した。

この事例は、避難場所に関して、「最善／次善／三善」を併用する大切さを示唆している。自治体が指定する「最善」の避難先だけでなく、「次善」、場合によっては「三善」の場所を独自に見だし、そこへ「も」避難する訓練を実施すべきだ。絶対安全な「最善」の避難場所に十分な時間的余裕をもって避難するのが、理想である。しかし、現実には、それがもはや実現できない状況に追い込まれてしまうから、ところが、そのような状況下で「何とか手を打つ」ための研究や訓練が不足しているからこそ、被害をゼロにできないのだ。「最善」ばかりを追い求める避難場所指定や訓練が、逆説的に人命を奪っている恐れは十分ある。

